資料２－１－１

鹿児島港 国際クルーズ拠点整備事業

国土交通省 港湾局

国土交通省

事業概要

国土交通省

【事業の目的】

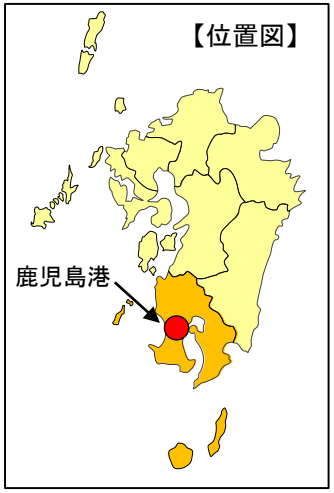
国際クルーズ拠点の形成に伴う東アジアを周遊するクルーズ船の寄港増加に対応するため、鹿児島港中央港区において、港湾施設の整備を行う。

【事業の概要】

整備内容　：岸壁（水深10m）、航路及び泊地（水深10m）、駐車場、旅客上屋

事業期間　：平成30年度～平成33年度

総事業費　：89億円（うち、港湾整備事業費　：　78億円）



《整備スケジュール》

港名	地区名	区分	施設名	H30	H31	H32	H33
鹿児島港	中央港区	直轄	岸壁(水深10m)	■	■	■	■
		直轄	航路及び泊地(水深10m)				■
		起債	駐車場				■
		民間	旅客上屋		■	■	■

《位置図》

鹿児島港の概要（クルーズ関連）

国土交通省

・鹿児島港の背後には、桜島などの雄大な自然、仙巌園などの歴史的観光地といった、多数の観光資源に恵まれている。
・また、九州の南端に位置し、クルーズ市場の成長著しい中国など東アジアに近接し、地理的優位性も高く、寄港隻数は年々増加している。

鹿児島港背後における主要な観光地

（中央港区から約10km）

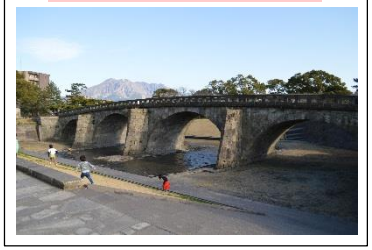
桜島

（中央港区から約9km）

城山展望台

（中央港区から約9km）

石橋記念公園



（中央港区から約10km）

仙巌園

（中央港区から約35km）

指宿砂蒸し温泉

（中央港区から約20km）

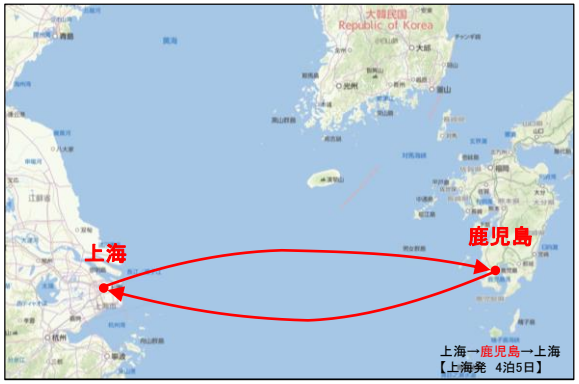
知覧特攻隊平和会館

（中央港区から約20km）

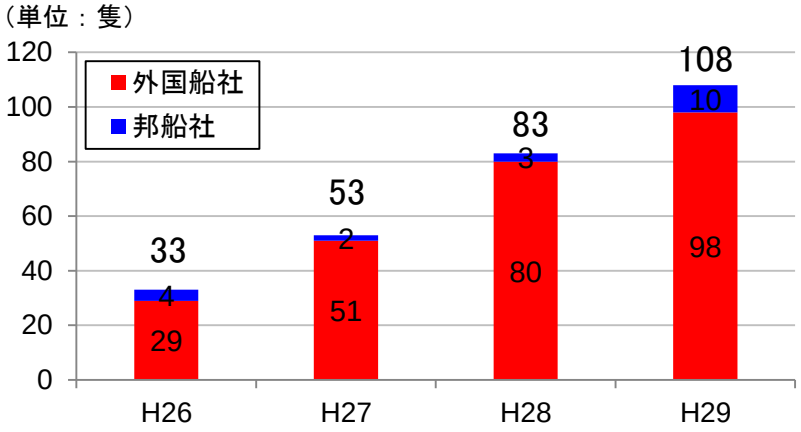
知覧武家屋敷

鹿児島港のクルーズ船寄港状況

【上海発着航路の例】
コスタ・セレーナ　鹿児島港寄港
総トン数：114,147GT　全長：289.59m　喫水：8.3m



鹿児島港のクルーズ船寄港状況



出典：港湾管理者からの情報をもとに作成（H30.3時点）

【鹿児島港】官民連携国際クルーズ拠点形成計画書（目論見）の概要

国土交通省

応募者	鹿児島県、ロイヤル・カリビアン・クルーズ（RCL）
目標とする国際クルーズ拠点の姿	鹿児島と世界をつなぐクルーズ拠点『Kagoshima Port』 ・鹿児島の優位性を活用した東アジアクルーズの拠点化 ・離島の自然等を活かした世界遺産クルーズ ・フライ（レール）＆クルーズ
寄港回数の目標	運用開始年（H34年）：50回、目標年（H44年）：130回　（RCLの目標）

国際クルーズ拠点を構成する施設

◆岸壁（既設・計画）
①16万トン級対応（既設）
②22万トン級対応（計画）
◆旅客ターミナル（計画）＜RCL＞
CIQを含む旅客ターミナルビル等を整備
◆駐車場＜県＞

岸壁等の利用に係る考え方

新たに計画する岸壁を、RCLが優先的に利用を予定。
・優先的な利用を行う期間：当初20年間（最大40年間まで）
・優先的な利用を行う日数：年間最大150日間

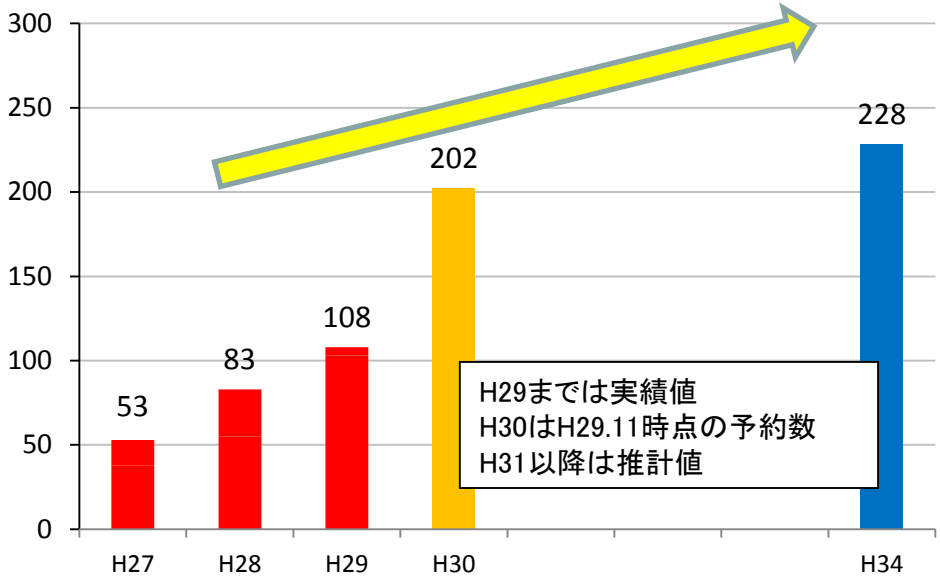
事業の必要性・緊急性

国土交通省

・世界のクルーズ需要は近年急速に増加中である。特にアジアのクルーズ人口の増加が著しく、将来的にも更なる増加が見込まれる。・そのような状況下、鹿児島港は国際クルーズ拠点として、平成34年に年間228回、最大22万トン級のクルーズ船の寄港を目標としている。
・供用中の本港区の水深9m岸壁及び中央港区の水深9m岸壁では、クルーズ船が利用できる日数は制限されると共に、22万トン級のクルーズ船寄港に対応できない状況にある。

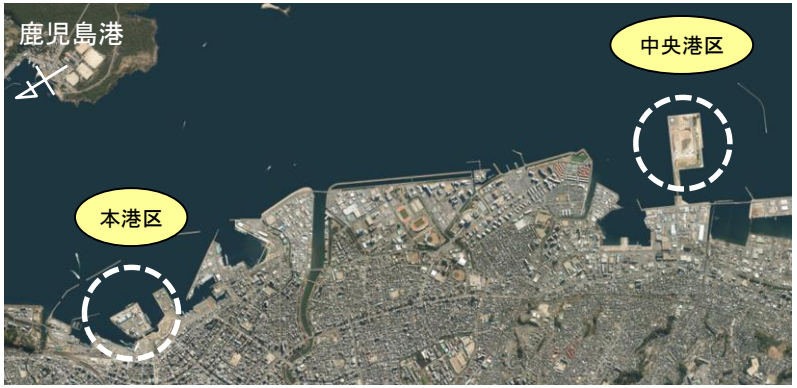
（単位：隻）

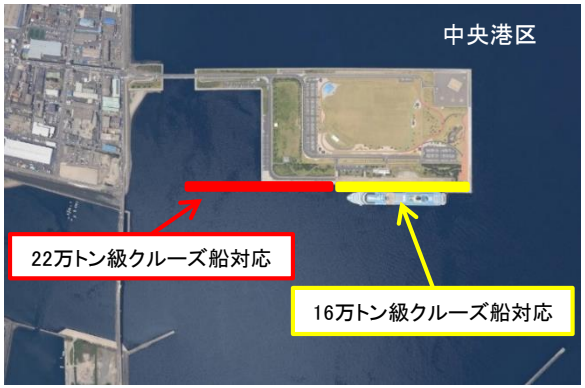
鹿児島港におけるクルーズ船寄港需要



（寄港回数について）
H29実績：RCL社 5回、他船社 103回
H30想定：RCL社 24回、他船社 178回
H34推計：RCL社 50回、他船社 178回
H44推計：RCL社130回、他船社 178回
※H30予約数について、H29.11時点における見込みとしては
RCL社が24回、他船社合計が178回。
また、鹿児島港における官民連携国際クルーズ拠点形成計画書より
RCL社はH34,44にそれぞれ50,130回の寄港を計画。
他船社については、H30以降、少なくとも同程度の寄港が
見込まれるとの想定のもと、寄港回数を計178回と設定。

クルーズ船受入岸壁の配置状況





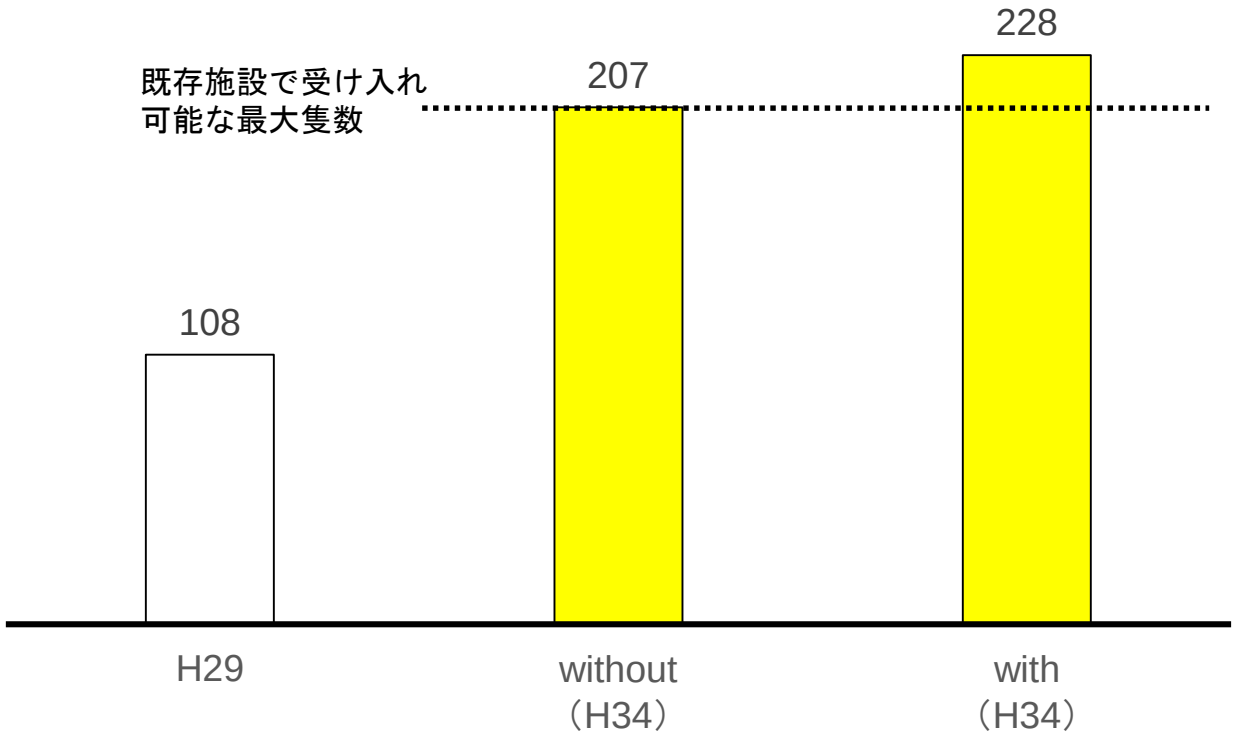
クルーズ船寄港岸壁
今回の事業箇所

費用便益分析におけるクルーズ需要等の設定

国土交通省

・事業を実施する場合（with時）の年間寄港隻数は、各船社からのヒアリング結果をもとに設定。
・事業を実施しない場合（without時）の年間寄港隻数は、既存施設で受け入れが可能な最大隻数を設定。
・上記を元に、事業実施による寄港隻数の純増及び大型クルーズ船への対応が可能となることに伴う外国人一時上陸者の増分を算出し、外国人一時上陸者の増加に伴う外航クルーズ船の入港による国際観光純収入の増加を便益として計上する。

＜年間寄港隻数＞



Withoutの場合、クルーズ船は中央港区及び本港区の既存岸壁を利用するが、それら岸壁はフェリー等の利用が見込まれることから、クルーズ船が着岸出来るのは年間207回に限られる。

Withの場合、新たに中央港区に岸壁を整備することで追加で年間255回のクルーズ船寄港が可能となり、鹿児島港におけるクルーズ船の年間受入可能回数は合計470回となる。

（新たに整備する岸壁を物理的に使用できる日数は年間365日だが、クルーズの寄港は前後の寄港地のスケジュール等を考慮した上で決定されるもの。クルーズ船寄港に対するお断り回数が非常に多い港においても年間の利用は約7割となっていることから、中央港区の新規岸壁についても稼働率を7割と設定。）

寄港隻数純増、及び大型クルーズ船への対応が可能になることに伴う訪日外国人一時上陸者の増分　：　67,567人／年

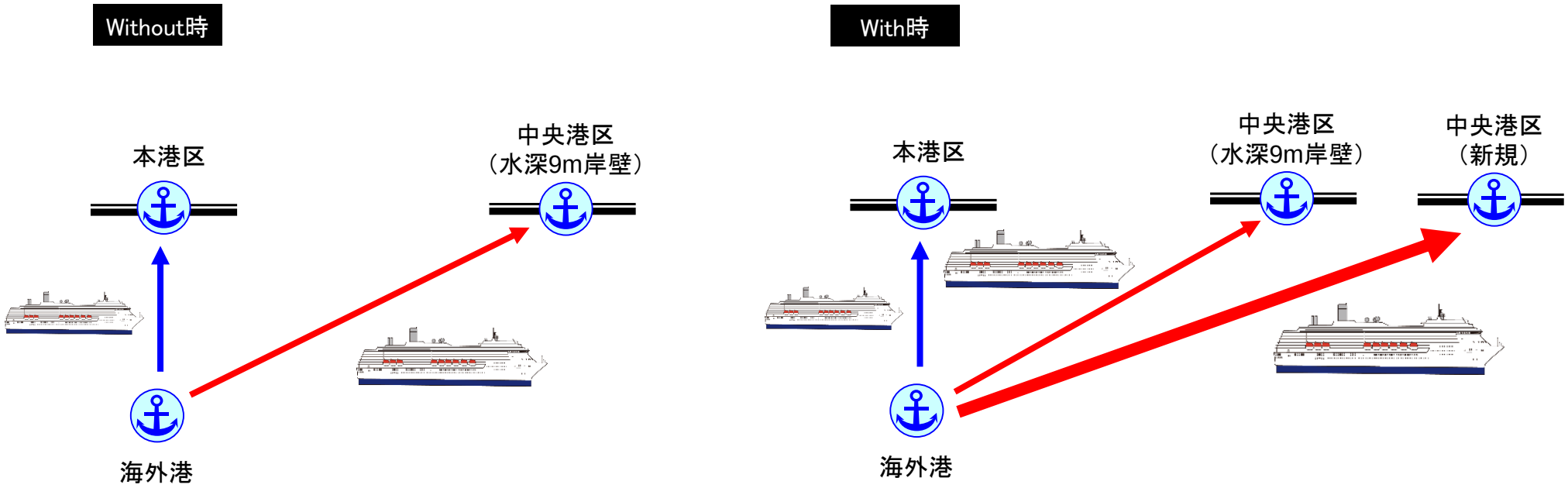
※外航クルーズ船の入港による国際観光純収入の増加便益（円／年）＝外国人一時上陸者数の増分×1人あたり観光消費額（20,000円）
（「港湾整備事業の費用対効果分析マニュアル」による）

本事業における便益

国土交通省

外航クルーズ船の入港による国際観光純収入の増加便益　　<u>248億円</u>

新たなクルーズ需要への対応が可能となることにより、国際観光純収入が増加する。



費用便益分析の結果（現在価値化後）

国土交通省

	項目	評価期間内 便益・費用（億円）
便益	外航クルーズ船の入港による国際観光純収入の増加便益	248
	残存価値	1
	小計	249
費用	事業費・再投資費	79
	維持管理費	8
	小計	87

費用便益比（B／C）	2.9
純現在価値（B－C）	162億円
経済的内部収益率（EIRR）	13.6%

注：端数処理のため、合計は必ずしも一致しない。

事業効果（貨幣換算が困難な効果等）

国土交通省

【①雇用の創出、地域活力の向上、国際交流の促進】

クルーズ船の寄港隻数増加やそれに伴う外国人一時上陸者の増加により、地域の観光関連産業の収益が増大し、新たな雇用が創出され、地域活力の向上が見込まれる。また、外国人との交流機会が増加することで、国際交流の促進ひいては我が国に対する国際的な好感度の向上にも繋がることが期待される。

【②港を通じた地域の振興、魅力ある港湾空間の形成】

クルーズ船の寄港隻数の増加やそれに伴う外国人一時上陸者の増加を契機として、地域住民等による、港の景観向上や地域づくりの取組みなどが促進され、港を通じた地域の振興が期待される。

また、周辺の景観との調和を考慮したクルーズ船受入環境の整備を進めることによって、中長期に渡って魅力ある港湾空間の形成が期待される。

【③訪日クルーズ旅行の魅力の向上】

鹿児島港近傍の豊富な観光地等を巡るクルーズ観光の拠点となるターミナルが形成されることで、鹿児島港と国内他港とを周遊するクルーズツアーの実現が可能となるなど、利用者にとっての選択肢が増加し、我が国のクルーズ旅行全体の魅力向上が見込まれる。

【④観光地としての魅力の向上】

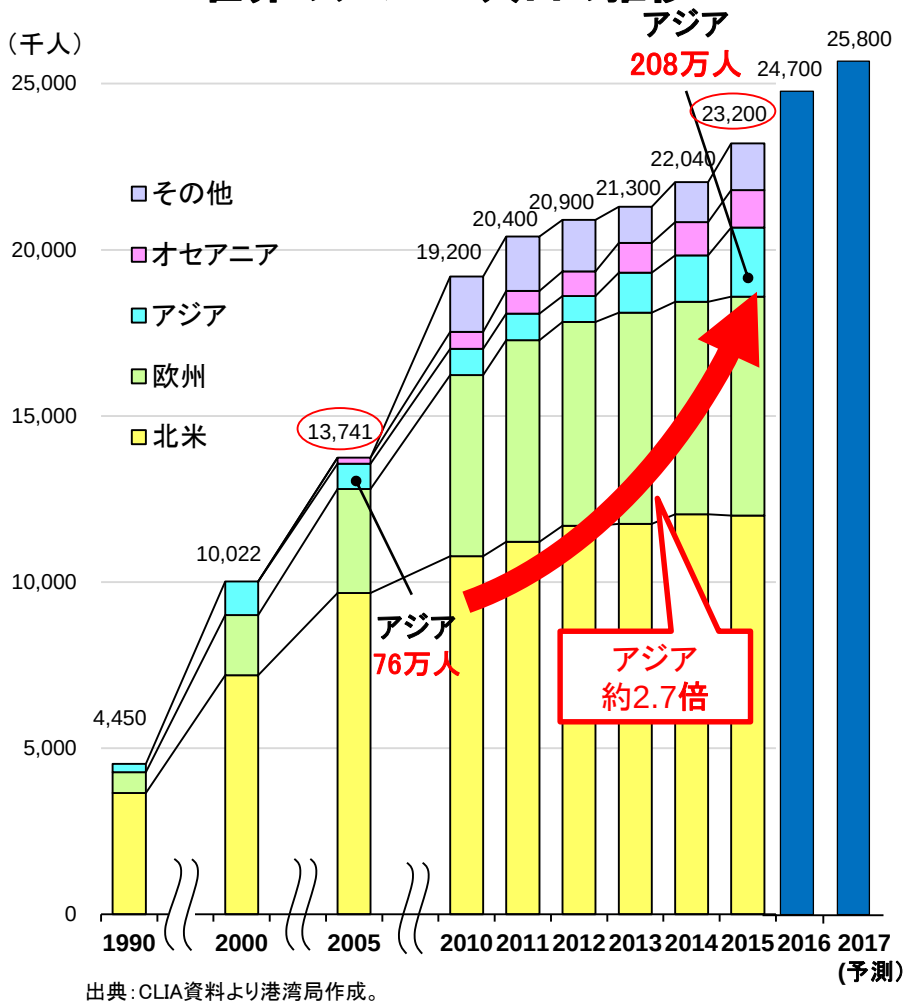
クルーズ船の一時上陸者や見学者が増加することで、観光地としての地域の魅力や知名度の向上が見込まれる。

（参考）世界のクルーズ人口の推移

国土交通省

・世界のクルーズ人口は近年急速に増加中。
・中でもアジアのクルーズ人口は2005年（70万人）と2015年（208万人）を比較すると、約2.7倍と特に大きな伸びを示しており、将来的にも更なる増加が見込まれている。

世界のクルーズ人口の推移



出典：CLIA資料より港湾局作成。
※ 2011年以前のアジア数値はCLIAによる推定値。2017年は予測値。

将来のアジアのクルーズ人口の見込み

中国政府：
中国のクルーズ旅客数は、2013年から年平均33%で増加し、2020年までに**450万人に達する**
（出典）中国交通運輸部「クルーズ運輸業の健全な発展の持続促進に関する指導意見（2014.3.18）

Seatrade Asia Pacific Cruise Congress（2016年10月、上海）におけるMSC中華圏代表Helen HUANG氏の発言：
CLIAが、**2015年に100万人**に近くであった中国のクルーズ人口が、**2020年までに450万人に達すると予測していることについて、**「簡単なことではないが、中国では可能。」
（出典）Seatrade Asia Pacific Cruise Congress HP（2016.10.13）

カーニバル社のAlan Buckelew氏（当時COO、現CIO）：
中国のクルーズ人口が2020年までに**500万人に達する**
（出典）ザ・ウォール・ストリート・ジャーナル電子記事（2015.1.21）